

# ルイ・セバスチャン・メルシエ「戦争についてー夢ー」

## 翻訳・解題(1)

Traduction : Louis Sébastien Mercier, « De la guerre. Songe »

芹生 尚子(訳)

SERIU Naoko

東京外国語大学総合国際学研究院

Tokyo University of Foreign Studies, Institute of Global Studies

E-mail: nseriu@tufs.ac.jp

ふらんぼー(Flambeau) vol.46 2020, p.197-206.

原稿受理 2020-02-05 ; 最終版 2021-02-19

### 抄録

『タブロー・ド・パリ』において一八世紀パリに生きた広汎な人びとの日常的実践を叙述したルイ・セバスチャン・メルシエは、兵士という職業や戦争をテーマとする著述も残した。ここに翻訳を試みる「戦争についてー夢ー」(Louis Sébastien Mercier, « De la guerre. Songe », Id., *Mon bonnet de nuit*, tome I, Imprimerie de la Société typographique, Neufchâtel, 1784, pp.80-109)は、そのようなメルシエの関心を明らかにするものである。今回、訳出したのは、テキストの前半であり、次号以降でその続きを扱う。

### Summary (Résumé)

Auteur célèbre du *Tableau de Paris*, Louis Sébastien Mercier, qui a pour originalité de s'intéresser aux faits et gestes de la population précaire du XVIII<sup>e</sup> siècle, a également écrit sur la guerre et le métier des armes, qui concernent aussi la condition populaire. En témoigne son court texte « De la guerre » (Louis Sébastien Mercier, *Mon bonnet de nuit*, tome 1, Imprimerie de la Société typographique, Neufchâtel, 1784, pp.80-109) qu'il s'agira ici de traduire en japonais.

キーワード : ルイ・セバスチャン・メルシエ、一八世紀フランス、戦争、兵士、夢

© ふらんぼー Flambeau 46 (2020) pp.197-206.

183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室

183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1 Asahi-cho Fuchu City, Tokyo

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



私は、ある地方の国境にいた。軍隊の通過するその地には、何十万という数の兵士たちが波のように押しよせていた。彼らは整然と結集し、威風堂々と歩いていた。その歩みは、高らかに響きわたる軍楽の律動に伴われて、規則正しく運ばれている。彼らは、ただ一途に義務に服していたのである。そういったすべての様子が、圧倒的な光景として眼前に広がっていた。私は考えに耽っていた。このおびただしい数の兵士たちは、なんのために同じ旗のもとに集まったのだろうか？

「ああ！」私は心のなかでつぶやいた。「兵士たちが、徳によって導かれているならば、どこかの暴君を打ち倒して、その手から世界を解放しようとしているのであれば、抑圧された人びとの自由を取り戻すために行進しているならば、私たちの敬意と愛に値する。彼らは、人間の諸権利の神聖な防衛者なのだから」

突然、この数多の兵士たちは、動きを止めて、四方八方に散っていった。戦士たちのこの驚くべき群れを目にした私の頭は、生起する思考のために熱くなっていたが、その興奮も冷めやらぬままに、私は彼らの後を追いかけていた。彼らを突き動かす感情がなんであるかをその挙動のうちに見極めようとしていたのである。ところが、なんという驚きであろうか。同じ祖国の子として生まれ、同じ軍服をまとう二人の男が、互いに剣を抜いて執拗に激しく戦っているのが見える。私は、すぐさま一人の男のところへ駆けつけたのだが、手遅れだった。もう一人の男が、戦友の温かく脈打つ心臓から、血の湯気を立てている剣を引き抜いているところだった。

「ああ、むごたらしい！」私は叫んだ。「友にして兄弟である人に、なんということを！」

「まさに友にして兄弟と呼ぶにはふさわしい」きっぱりとした声が返ってきた。「なにせ勇敢な男として死んだのだから」

「この人は、どうしてこんな仕打ちを受けることになったのでしょうか？」

「どうということはない。この男は入隊したてで、おれたちは喧嘩しただけのこと。新入りは、まぎれもない勇気の証しを示すことで、入隊料とするのが習わしだ。しきたりどおりにやったことは、彼の名誉となるだろう。殺されてしまったのは残念だが、もう少し防御をしっかりとすれば、とどめを刺されることは避けられただろう。そして生きていれば、お互いによき友となったにちがいない」

「まさかそんな」私は動揺し驚愕して返答した。「なんて奇妙な蛮行でしょう！でも、あなたもこれで終わりです。逃げなければ、殺された兵士の仲間と上官が、流された血に必ず報復するでしょう」

「ふむ！自分は連中の示すお手本に従って行動したまでのことなのだ。それを拒めば、卑怯者とみなされる。兵士にとって栄誉とは、死を常に愚弄することなのだから。一人の敵に立ち向かうことを恐れない者は、敵の存在を恐れないというわけだ。勇気の証しとはそうい

---

<sup>1</sup>本稿は、JSPS 科研費 18K01023 による研究成果の一部である。翻訳に際して東京外国語大学特任研究員の竹下和亮氏に貴重な助言をいただいた。記して感謝したい。

うもの」

「そんなことが、祖国にとって有益な勇気なののでしょうか！」

「ああ！死ぬなんてことは、なんでもない。あそこで二つの小隊が喧嘩しているのが見える。実に盛大にやりあっている」

「熱に浮かされたようなあの凶暴さの原因はなんなのでしょう？同じ軍服をまとう兵士になったのは、仲間うちで殺し合うがためとでもいうのでしょうか？」

「それはまったく見当違い。袖飾りの色、ボタンの形が異なれば<sup>2</sup>、敵意が生まれることになる」

「でも、兵士は、同じ旗のもとで行進し、同じ戦闘に身を投じるものではないですか？」

「そのとおり。だが、その時が来るまでは、各自が各自の争いに決着をつけようとやっきになり、これから戦う敵を憎む以上に、おそらくは、仲間同士で憎み合う。そして将校も、それぞれ一つ目上の者を競争相手と嫉妬する。それでも、間もなく、われわれは、力を結集して矛先を\*\*\*に向けることになるだろう。その時には、目に物をみせてやりましょう」

「なんとまあ！また別の世界に殺すべき人間を見つけようとでもいうのでしょうか？これでは、敵と戦う前に自滅しかねません」

「それがどうしたというのか？おれたちは、死によってしか生きられない。一人が前に進むためには、一人が殺されなければならない。おれの知ることはこれに尽きる」

「あなたは、なんという恐ろしい仕事に就かれているのでしょうか！なんのために互いに殺し合い、仲間の血を流さなければならないのでしょうか？なぜ些細なことで心を固く閉ざすのでしょうか？憐れみも同情も感じることはないとでもいうのでしょうか？父を殺して孤児を生み、その母を嘆き悲しませながら平然としていられるのですか？ああ、心の叫びに耳を傾ければ、あなたも責めを感じるでしょう」

「そのような美辞麗句を聞く耳は持たないが、真実とはどういうものか教えましょう。おれの人生は、はなはだ貧しいものだった。大食らいの駝鳥のような胃袋に、消化させるものを与えることもままならない有様だった。それでも、この身の丈が五ピエ六プスになった頃のこと、帽章をつけ、金モールで飾られた服をまとい手にはステッキを持った男がやってきた<sup>3</sup>。その男は、おれの身長を測った後で、先端に猟肉がふんだんにぶら下がった長竿を差しだした。そして、銀貨三十エキュほどが入っている袋を取りだすとそれを耳元で鳴らしたのだった。こんな誘惑から逃れることのできる人間はいるだろうか？世にいう祖国なるものが、美しい化身となって現れて、足元に身を投じ涙ながらに助けを求めて懇願したとしても、これほどまでに心が揺さぶられることはなかっただろう。わが入隊の日は、人生まさに最高の日。それまで食欲が完全に満たされたことなど一度もなかったが、その日だけは違った。ワインを飲み、そし

<sup>2</sup> 軍服のボタンや襟飾りは部隊によって異なっていた (Constant Rienhart et René Humbert, *Les Uniformes de l'armée française depuis 1690, t.3, 1900*, Leipzig, t. 3, p.63-69 を参照)。

<sup>3</sup> 一ピエは、約三二・五センチ。一ピエは、一二プスに相当。身長は、リクルートの際に重視された基準であった。たとえば、一七七六年三月二五日の王令によれば、歩兵の場合、身長が最低五ピエ六プス、騎兵では、最低五ピエ三プスに達しなければならないとされている。

て女を手に入れた。飽くまで食べ、咎められることなく大騒ぎに興じることができた<sup>4</sup>。だが、それにつづく日々は、この至福の日とは似ても似つかないものだった。隷属の重みがひしひしとこの身にのしかかるのが感じられた。そんなわけで、四年で七回脱走することになったのだ。そして、なにごとにもこだわらず、勝利も敗北も同じように見なし、どんな政府にも愛着を持たなかった。全てを失ったものにとって、失うものはもはやなにもないのである。ご存知のとおり、兵士の境遇は、戦闘で二十回勝利したとしても変わらない。栄誉を受けることもほとんどない。あらゆる武勲と褒賞は偉い将校が独り占め。おれは、世の専制君主たちがかわるがわる叫ぶのを聞いた。その声はこう言っていた。『お前にパンを与えよう。そのかわりに、お前の血は余すところなくわが輩のものとなる。わが意を示すどんなちいさな合図をも見逃してはいけない。その命ずるがままにお前の血は最後の一滴まで流されなければならない』

おれは、自分の血を最高値で売ったというわけだ。

おれがしなければならなかった辛い労働、そして真冬に行なった長く辛い行軍については語らないでおこう。しかし、何度、寒さと空腹が一緒になってこの身に襲いかかったことか。そして、何度、刺すような北風に身を凍らせながら地面で眠らなければならなかったことか。それでも、いい思いをした時もあった。復讐の甘美な喜びを味わったことも一度ならずあった。それは、ある日、疲労困憊に耐え忍ぶこと二ヶ月の末に、やっと、陥落した都市に入城した時のことだった。いくつもの家の扉を押し破り、めぼしいものはないかと手当たり次第に荒らし回っていると、一人の若く美しい女が、髪を乱したまま、子供を腕に抱き身を隠しているのが目に入った。すると、略奪の情熱が体の中で後退し、そのかわりに、色欲の炎が燃え上がった。攻め落とされた都市では全てのことが許される。おれは、女を奪おうとした二人の戦友を突き刺し、うるさく鳴きわめく子供の喉を切り裂くと、その母親を犯し、家の四隅に火を放った」

「なんと恐ろしい」私は震えながら言った。

「しかたのないことだ。人間は、野原の草のようなもの、刈れば、また生えてくる。略奪された都市も一夜もたてば、修復される。そう！おれたちは、石ころ二つとて折り重なったままにしてはおかなかった。それが命令だった。われら勇者にお馴染みのそのほかの所業については、ここでは語らないでおこう。そして、おれが果敢にも二度までも杖刑を受けたことにつ

---

<sup>4</sup>メルシエは、パリで新兵勧誘を行う将校たちについて、次のように書いている。「彼らはけしからぬ手段を使う。『衛兵所の娘たち』を抱えておいて、その娘たちを餌に、少々遊び好きな青年を誘惑する。次に酒場も持っているので、酒好きな者はそこで酔いつぶす。それから告解火曜日の前日や、聖マルタンの祝日の前日には、長い竿に、七面鳥や、ひな鳥や、うずらや、小兎をいっぱいぶら下げて、淫蕩の誘いにのらなかった連中の食欲を刺激する。[……]何しろ生まれてからこのかた一度も美味しいご馳走など食べたこともない連中なので、たった一日の幸福な日と引き換えに、自由を渡してしまうのだ。彼らの耳元で、銀貨のつまった袋を鳴らして、こう叫ぶ奴がいる。『こいつが欲しい者、いないかね？こいつが欲しい者、いないかね？』」(メルシエ、『十八世紀パリ生活誌ータブロー・ド・パリー』、原宏編訳、岩波書店、1989年、上巻、65-66頁)。



いても多言を費やさないでおこう<sup>5</sup>。その時、刑の執行人となった仲間たちが、この逞しい肩を打ち血みどろにしたことについても、とやかく言いますまい。それに復讐する機会があったのだから。この力強い腕が、高みの見物を決め込む将校の目にとまり称賛の的となったことも一度ならずあったのだから。結局のところ、おれは、恩赦に乗じて最初の部隊に戻ることにした<sup>6</sup>。そこがほかの所よりいいというのではないが、そこで生業にはげむことにした」

「それがどのようなものなのか教えていただけませんか？」

「いやはや！今、戦争の最初の火の粉が上がった。おれたちはその火を注意深く守り絶やさないようにするのだ。さあ、あそこに、新しい軍服に身を包んだ兵士たちが、軍旗を風になびかせて行進しているのが見える。だが、あの立派な部隊も、あと一ヶ月もすれば、せいぜい残っているのは百人のうち一人ぐらいだろう。その時を待って入隊すれば、俸給も一日に三スー高くなるというものだ」

「まさか！本気でそんなことを？」

「おれに劣らず仲間の兵士たちもそしてすべての将校も遺産にありつくことばかり考える。そしてそのためには、まず死人が出なければ……」

私は、恐怖の眼差しで男を見つめた。どうかくれぐれも人間性を忘れないようにという言葉を贈った。彼がかすかな笑みを浮かべたのを見て、私はその場を離れた。

道ゆく途中、太鼓の音に合わせて行進する部隊に遭遇した。兵士たちは、声高になにやら不平を言っている。その時もまだ自分の心から湧き出る想いに惑わされていた私は、てっきり彼らが戦争を呪っているのだと思って声をかけた。「おそらくはあなたの心の奥底で人間性が声を上げ、あなたに虐殺される哀れな人びとのために弁明を行なっているのではありませんか？」

「そんなことではまったくない」とだれかが答えた。「おれたちが送り込まれるのは、貧しく荒れた不毛な地。そこには農民のスープのほかに略奪するものはなにもない。おれたちが後にするのは、豊かな国。そこでは、荒らし放題、好き放題ができたのだ。おれたちの司令官が大臣の機嫌を損ねたせいで、巻き添えでこんなことになったのだ」

私は、もはやなにも質問しまいと固く心に決めて、その場から立ち去った。家に戻ると、書物のなかに慰めを見出さなくなった。古代より世界を荒廃させてきたこの災禍を食い止める

---

<sup>5</sup> 「バゲット *baguette*」と呼ばれる木の枝できた細い棒あるいは杖状のもので殴打される懲罰。材質としては、たとえば、柳など弾力性のあるものが用いられたとされる。処罰を受けるものは、上半身裸となり、二列に並んだ兵士の間を進み、それぞれの兵士から打撃を受けた（たとえば、Louis-Félix Guinement Keralio, *Encyclopédie méthodique. Art militaire*, tome I, Paris, Panckoucke, 1784, p.205 を参照のこと）。隊列を構成する兵士たちの人数またその間を往復する回数によって極めて過酷な体罰となった。ヴォルテールの小説『カンディード』においても、徴兵官にだまされて兵士となった主人公が脱走に失敗して同様の体罰を受けるという場面がある（『カンディード』植田裕次訳、岩波書店、2013 年、272 頁）。なお、カンディードが入隊させられたのは「ブルガリア王」の軍隊であるが、架空のものであり、ヴォルテールの念頭にあったのはプロイセン軍だとされる。

<sup>6</sup> アンドレ・コルヴィジエをはじめとする軍事史家が強調するように、近世の軍隊では、脱走は厳罰の対象となる犯罪だったが、極めて頻繁に起こった。脱走に対して一七一六年の王令は死刑を定めているが、刑の執行は例外的だったとされ、また、恩赦も頻繁に出された（André Corvisier, *L'armée française de la fin du XVII<sup>e</sup> siècle au ministère de Choiseul. Le soldat*, Paris, PUF, 1764, t. 2, p. 722）。

解決策はないものかと、私はかの有名なグロティウスの論考を紐解いた<sup>7</sup>。私はこの大著を読んだ。だが、書物には一貫して気分の悪くなるような冷徹さがあつた。そこには、尋常ならぬ忍耐で収集された残虐行為の数々の事例、また、悲しく無用で長ったらしい定義が書き連ねられていた。私は、嫌悪感に襲われた。そして、その感情を、書物の初めから終わりまで拭い去ることができなかった。こんなに重要な問題が、こんなに悪しく論じられたことはない。なんということか？地球が血で覆われてもよいというのか？人殺しの仕事をこんなにも寛大に扱うのか？森の片隅で待ち伏せする素性の知れない悪党であれば処罰されるところを、トランペットとファンファーレの鳴り響く戦場で人を殺せば荣誉となる？戦争という狂気は、不当で忌まわしく、無辜の人びとにとってほぼ常にただただ有害である。それなのに、この哲学者は、自らの手の中にある松明に火をつけて恐るべき真実を照らし出そうとはしない。彼の心が、こみ上げる憤怒によって満たされることもない。彼の関心は、もっともおぞましい行為をいかに正当化するか、また、犯罪をいかに秩序正しく遂行するかを法学的な観点から考察することである。そして、そのための根拠として、銜学的であると同時に胸の悪くなるようなテキストを多々引用することである！こういった権威を有するテキストは重要である！しかし、理性と人間性に依拠したもののみを尊重すべきであり、そのためには、人為的なものは排除しなければならないのである。

グロティウスは、決して原理に立ちもどらない。壊疽にかかった傷口に鉄の焼きごてを当てることもせず、その場しのぎの解決を弄するだけである。戦争という怪物を緋色のマントで覆い、顔には仮面をかぶせ、頭には王冠を戴かせる<sup>[原注]</sup>。怪物が人間の血をしたたらせているというのに、その前に平身低頭する彼の目には、それが、国王の緋色と映る。私は心の中で自問する。ああ、この巨人を高尚なものに見せかけている小道具をだれが剥ぎ取るのだろうか？そして、あのぞっとするような食人鬼の姿をだれが暴き出すのだろうか？子供や弱者そして罪なき者の肉体に飢えたこの食人鬼は、帝国そして世界のいたるところに、殺戮と血の匂いを食欲に嗅ぎつけるのである。戦争という重要な問題を深く探求した書物が書かれることなく今世紀が終わることのないように祈願しつつ、私はグロティウスの書物を焼き捨てた。

深いメランコリーに取り憑かれて、私は、ベッドに身を投げて横たわった。私が見たこと、そしてそれよりもさらに、読んだことを忘れてしまいたいという思いだった。眠りが私の感覚を捉えるやいなや、私は、異国の空の下、田園のただなかに運ばれた。そこでは、八万人以上の男たちが、携帯用の軽い布地でテントを張り、藁の寝床をしつらえていた。これほど驚くべき、そして素晴らしい光景を目にしたことはない。これこそが、原始の状態にあり、原始状態の自由を享受する人間だと私はつぶやいた。彼らは、都市のあのいかめしい城壁の虜ではないのだ。だが、この男たちをよりつぶさに観察すると、彼らが人殺しの道具を携えているのが見えた。そして、三十あまりの大砲がずらりと列をなしているのが見てとれた。そして、その

---

<sup>7</sup>オランダの法学者グロティウスの著作『戦争と平和の法』（一六二五年）。哲学者ジャン・ジャック・ルソーが、『社会契約論』（一七六二年）などでグロティウスを厳しく批判したことは有名である。ルソーの信奉者であったメルシエも以下で批判的見解を述べるのだが、そこから、近代的な国際法の礎を築いたグロティウスの著作が、専門家の世界を越えて啓蒙の言説空間に流通し、そこで議論されていたことが看取される。

[原注] 正しい戦争がある。それは防衛のための戦争であり、自然法に則るものである。

砲身は幾何学的な角度で固定され狙いがつけられていたのである。そして、なんと驚くべきことか！私自身が、赤いジストコールをまとい、背囊を背負っている。私は兵士になっていたのだ。あの死を吐き出す鉄の長い筒が、平和を愛する私の手のなかにある。あの呪わしい銃剣が私の脇にぶらさがっている。太鼓の音が聞こえた。私は、哲学者かくあらんと、かつてホラチウスとデモステネスがそうしたように、武器を捨てた。すると、突如、私は取り押さえられた。「偽証者」「卑怯者」と罵声を浴びせられ、前の晩に私が交わしたという誓約を思いだせと迫られた。

「昨日のことだ」だれかが言った。「お前は酩酊して、しかじか約束したではないか」

「この私が、約束を？ああ、そうかもしれません。みなさん、私が、同類である人間を殺すなどと約束した時に、私は、ひどく酔っておりました」

そこで、私はなぜ武器を取るべきではないか証明するため演説しようと身構えたのだが、ちょうどその時、私は、従順な群衆に押し流されて歩き始めなければならなくなった。彼らは私とは異なって意気揚々としていたが、歩くということにかけては、私も皆と同じだったのである。大砲のすさまじい音がとどろき、戦いの火蓋が切られた。人間のつくり出したこの雷が一日で破壊する人間の命の数は、自然界の雷が幾世紀ものあいだに奪った人間の数よりも多い。炎の噴火と煙の濁流がかわるがわるやって来て、天空が赤く染まっては暗くなるのが見えた。人を死にいたらしめるあの鉛の弾が音を立てながらいたところで飛び交った。司令官たちが、どなり声を上げ、密集した兵士たちの列を前方へ追い立て急がせていた。彼らは、ただやみくもに走り、そして、自らの血で屍体の山を洗うことになった。発砲することを余儀なくされた私は、銃の先をだれもいない虚空に向けた。感覚的な存在を撃つくらいならば、いっそ死んだ方がよい。

恐怖で私の顔から血の気がひいた。私を臆病者と非難した者たちは、自分の恐怖心を紛らわそうと強い酒を飲んで精神錯乱を起こしていた。なんという光景！こんな凄惨な光景は地獄にも見られまい。悲痛な叫び声、大砲の轟音、あの凄まじい落雷の反響が、耳をつんざき、心を凍らせた。息も絶え絶えとなった男たちが、軍馬に混じって地に倒れていた。また、ほかの者は、身体を半ば押し潰された状態でなお這いつくばり、恐ろしい叫び声を上げていた。しかし、その声はだれにも届かない。方々に、生気を失って動かない目があった。逆立った髪で覆われた顔があった。それらは、蒼白で、血にまみれていた。そして、死を請い求める声があった。痛みと、苦しみと、残虐さのあらゆる情景、怒りと暴虐そして絶望のあらゆる絵図、あらゆる形態の負傷、あらゆる種類の死、あらゆる苦悶が集まっていた。自然と人間性は、何度も繰り返し蹂躪された。空を飛ぶ鳥たちも恐怖のあまり逃げ去った。ただカラスだけが、嬉々として甲高い鳴声を上げ、兵士たちの跡を追いかけて、獲物を待ち構えていた。天よ！なんという狂気、なんという恐怖！私は、山積みとなった屍の上を歩いた。瀕死の男が一人、狂乱のうちに息をひきとろうとしていたのだが、その震える歯が私の足に噛みつく肉の一部を切り裂いた。次の瞬間、手に白刃をひらめかせ一人の騎兵が私めがけて突進して来る。その男は、彼の駆る馬よりもなお獰猛に、私の髪をひつつかみそのまま体を持ち上げて、もう一方の手に持った三日月刀を振りかざし、私の頭を打ち砕こうとしたのである。が、ちょうどその時、燃え盛る砲丸が私めがけて飛んで来た。それが、私の身体を引き裂くと、ばらばらに切断された手足があちらこちらに飛び散った。



死んでこんなに嬉しい思いをした者はいない。程なくして、殺戮の戦場も、英雄的狂気に憑かれて殺しあう常軌を逸した男たちの姿も私の視界から見えなくなった。そして、この嘆かわしい地球の形象が、遠ざかり、そして、弱々しい光で照らし出された小さな点として区別できにすぎなくなった。私は、湿った暗闇のなかを飛ぶように進んでいった。私は、戦いの恐るべき喧騒を抜け出て、宇宙の沈黙と静寂のなかにいた。そして、成すすべもなく流れる気体のなかに脆弱な身を委ねていた。私はどうなるかと不安を覚え始めた時に、足がなにやらもっと固いところに着くのが感じられた。そこで気がついたことなのだが、わが身は、真っ白な骸骨になっていたのである。だが、この変わり果てた姿を恐ろしいとは思わなかった。実際のところ、なぜ人が自分の骨をこれほど恐れるのか私には分からない。瀟洒な館を内から支える梁は、綺麗な外見をつくり出す外側の飾りと同じぐらい素晴らしいのではないか。

(つづく)

## 訳者解題

本稿は、ルイ・セバスチャン・メルシエ（一七四〇—一八一四）の小編「戦争について—夢—」の試訳である。底本としては、Louis-Sébastien Mercier, « De la guerre. Songe », Id., *Mon bonnet de nuit*, tome I, Imprimerie de la Société typographique, Neufchâtel, 1784, pp.80-109 を用いた。また、その際、ジャン＝クロード・ボネらによる校訂テキストおよび訳注を参照した（*Mon bonnet de nuit suivi Du Théâtre*, édition établie sous la direction de Jean-Claude Bonnet, Mercure de France, 1999, pp.71-92）。同テキストは、*Songes et visions philosophiques, dans Voyages imagindaires, songes, visions et romans cabalistiques*, vol. XXXII, Amsterdam et Paris, 1788 にも収められている。また、初出は、*Songes philosophiques*, 1<sup>ère</sup> partie, Lejay, Londres-Paris, 1768, pp.213-264 であり、底本として用いたテキストはその改訂版である。今回、訳出したのは、テキストの前半であり（底本、pp.80-94）、次号以降でその続きを扱う。

メルシエは、啓蒙の世紀にパリで生まれ、アンシアン・レジームの終焉から革命の動乱を生き抜いた。その後ながらく忘却された彼の膨大な著作は、二〇世紀後半になり、一八世紀の歴史や文学を専門とする研究者に注目され、紹介と分析がなされるようになった<sup>8</sup>。今日メルシエの名を知らしめた著作といえ、人は、いうまでもなく、『タブロー・ド・パリ』（一七八一—八八）を思い浮かべるであろう<sup>9</sup>。そこで、メルシエは、パリという都市空間の相貌を人びとの生活に密着して叙述するのだが、その際、身分社会の底辺に生きる民衆の存在に目を向けている。メルシエのまなざしは、民衆に共感しながらも偏見や恐怖をぬぐいえない

<sup>8</sup> 『タブロー・ド・パリ』を含むメルシエの著作の校訂および出版プロジェクトを牽引したジャン＝クロード・ボネの尽力によるところは大きい。また、メルシエの業績の多様な側面について、たとえば、以下を参照することができる。Jean-Claude Bonnet (dir.), *Louis Sébastien Mercier, un hérétique en littérature*, 1995, Paris, Mercure de France.

<sup>9</sup> 同書は、日本においても原宏氏の編訳によって知られ親しまれている（前掲注5）。また、メルシエのユークロニア小説『紀元二四四〇年—またとない夢』も原宏氏によって翻訳されている（野沢脇・植田祐次監修、『啓蒙のユートピアⅢ』、法政大学出版局、1997年、1-273頁）。



いといったように両義的なものであったが、彼らの日常的実践を捉えようとするメルシエの筆致は、一八世紀文学のなかで独自の位置を占めている<sup>10</sup>。

広汎な人びとの経験に関心を寄せたメルシエは、戦争や軍隊についても紙幅を割いている。『タブロー・ド・パリ』のなかでは、ポン=ヌフまたセーヌ河岸で繰り広げられる募兵の情景を批判を込めて描写し、戯曲『脱走兵』(一七七〇)では、平時においてなお死刑に脅かされた脱走兵の不遇を訴えた。今回訳出した『戦争について－夢－』もまた、このようなメルシエの著述の従来あまり知られていない側面を浮かび上がらせるものである。兵士という職業とはどのようなものか？戦争とはどのような体験か？個人にはどのような行動の余地が残されているのか？メルシエの語る夢には、同時代批判が込められているのだが、それは、時空を越えて、切実な問いを今日の読者にもつきつけるものである<sup>11</sup>。

---

<sup>10</sup> この点については、歴史家アルレット・ファルジュの以下の論考に依拠した。Arlette Farge, « Louis-Sébastien Mercier : Tableau de Paris », Id., *Effusion et tourment, le récit des corps : Histoire du peuple au XVIII<sup>e</sup> siècle*, Odile Jacob, Paris, 2007, pp.44-53.

<sup>11</sup> 一八世紀に展開した「夢」をテーマにする文学と風刺の関係については、以下が極めて示唆的である。Françoise Dervieux, « Les songes satiriques », *Dix-huitième siècle*, vol. 40, no. 1, 2008, pp. 683-701.

